

2024年2月14日

参議院事務局調査部門・日本工学アカデミー共催シンポジウム開催報告

政策共創推進委員会議会事務局グループ担当

中島 義和

EAJ 政策共創推進委員会（永野 博委員長）では、参議院事務局調査部門・日本工学アカデミー共催シンポジウムを2024年2月14日（水）15時—17時に参議院第二別館東棟6階研修室1で開催した。これは同委員会議会事務局グループの活動として、参議院事務局ならびにEAJで共通して検討している課題をトピックに据え、毎年1回のペースで参議院事務局調査部門と共催で行っている活動である。今年度は令和4年（2022年）度11月にEAJ政策提言委員会において検討して提言された「インクルーシブなSTEM研究環境の構築」政策提言プロジェクト（牧原 出 プロジェクトリーダー）を基に「インクルーシブ」をトピックに設定した。

参議院事務局企画調整室の金澤真志室長の開会のご挨拶に引き続き、EAJ 政策共創推進委員会の永野博委員長より当シンポジウム開催の経緯や意義について挨拶を行った。続けて、東京大学の牧原出先生、熊谷晋一郎先生、並木重宏先生、綾屋紗月先生の4名の先生方にご登壇いただき、「インクルーシブなSTEM研究環境の構築」提言書についてご発表いただいた。

牧原先生からは東京大学先端科学技術研究センターでの取り組みとして、研究分野の柱のひとつとしてバリアフリーがユニークであること、「当事者研究」として展開されており東京大学全体でのバリアフリー化でリーダーシップを発揮しているとの話があった。さらに、広く社会に根付かせるためには政策展開が必要であること、EAJ 政策共創推進委員会の活動のひとつである「政治家と科学者の対話の会」の活用など関係機関との連携強化、さらには法令等の新設・改正などが必要であることをご紹介いただいた。

引き続き、提言の内容を紹介する形で、まず熊谷先生からは、現状の研究環境が大きな障害を持たない多数派（おもに男性健常者）にカスタマイズされた環境であること、研究に必要なスキルの本質を明瞭化し、障害を持つ研究者が非本質的なスキルについて障害を強く感じない、もしくは意識しないで研究に取り組める環境を構築することの重要性について、「障害の社会モデル」という考え方を踏まえながら、小児医療に従事されているご自身の経験を交えてのご紹介があった。さらに、ダイバーシティ（Diversity）とインクルージョン（Inclusion）、公平（Equity）や所属感（Sense of belonging）などの考え方の違いや、DEIB（多様性、包摂性、公平性、所属感）評価測定による日欧米の比較から日本の評価値が極めて低いこと、さらに教育・研究が高等教育の上の段階に進むにつれて障害のある学生の割合

が減少することなど、解決すべき課題が多く残る現状をご紹介いただいた。続いて、並木先生からは化学研究者として研究環境改善の取り組みの現状とそこから得られた知見を共有いただいた。綾屋先生からはスティグマという概念のご紹介とスティグマを減らすために必要な考えや対策、さらにインクルーシブを考慮した能力評価指標である narrative CV などについて具体例を交えてご紹介いただいた。

参議院文教科学委員会調査室の竹内健太調査員からは、「よりインクルーシブな教育・研究環境に向けて ～特別支援教育における現状と課題～」と題して、当事者が存在することの大きさ・意義からはじまり、とくに教育面に重点を置いて多くの具体的な数・統計値を踏まえながら現状についてお話しいただいた。

その後、出席者の間で活発な質疑応答、意見交換が行われた。続けて、永野委員長から「政策共創推進委員会 三年間の自己総括&日本工学アカデミーへの提言」について紹介があり、最後に金澤室長のご挨拶をいただいて閉会した。

このシンポジウムでは、竹内調査員からは主に初中教育における課題、EAJ 側からは大学における課題が紹介され、期せずしてこの問題についてのより全体的な構図を思い描くことができたのは大きな成果であった。インクルーシブという観点からの問題認識は、多数派にとって必ずしも直接的な問題でないと考えられることも多く、これまで大きく取り上げられることが少なかったこと、しかし、今後、解決、改善に向けて取り組まねばならない重要な課題であることを強く認識させられた。発表者の方々の本件への取り組みを拝聴して、改善に向けて我々の考え方や社会のあり方をどう変えていくべきかなどを具体的に学び、考えることが多いシンポジウムであった。



牧原 出 会員



熊谷 晋一郎さん



並木 重宏さん



綾屋 紗月さん